東北大医保健学科紀要　16(2)：105～113，2007

原　著

看護学生における精神障害者のイメージの変化について

斎藤秀光，光永憲香，齋　二美子
東北大学医学部保健学科　看護学専攻地域保健看護学講座

Changes of Nursing Students' Images of Patients with Mental Disorders
—— Comparison between First Grade and Third Grade Students ——

Hidemitsu SAITO, Norika MITSUNAGA and Fumiko SAI
Department of Nursing, School of Health Sciences, Tohoku University

Key words：精神障害者のイメージ，精神障害，看護学生，精神科看護

The purpose of this study is to understand the different images between the first grade and the third grade nursing students about mental disorders, images of patients with mental disorders, and so forth. Dealing with the images of patients with mental disorders, the number of the third grade students who had negative images against those patients was 45 percent less than that of the first grades. With regard to mental disorders, the third grade students who thought that everyone could suffer, or that those people were caused by stress or environment, or that most people remained stigma for those, amounted nearly half of the grade. However, none of the first grade students had such a thought. Although there was no relationship between the third grade students' understanding of mental disorders and their images of patients with mental disorders, the students who grasped psychiatric nursing lecture or community health practice about the cause of their images had no negative images against those patients. Therefore, it was suggested that the psychiatric nursing lecture or the community health practice had a great influence on nursing students in order to understand mental disorders and patients with mental disorders.

はじめに

一般人の抱く精神障害者に対する認識はマスメディアによる影響が大きく，否定的なイメージを抱きやすいといわれている。その理由として，ごく一部の精神障害者が起こした異様で，理解しがたい事件をマスメディアが取り上げ，精神障害者は，こわい，理解できないといったイメージをもたせるからであると思われる。精神障害の代表的疾患である統合失調症は以前は精神分裂病とよばれ，精神が分裂する病との誤解や偏見から，上記のようなイメージを助長してきた可能性が高い。そのため，2002年8月の日本精神神経学会総会で統合失調症に呼称が変更されている。

また，人がどのような精神障害者観をもっているかは，精神障害者への社会の対応を根本的に規

定してしまうほどの重要性を含んでおり[1]，その精神障害者へのイメージは精神障害者に接する看護援助に大きく影響すると思われる。精神障害者に対する看護学生のイメージに関しては，数多くの研究がなされている。講義に関する研究では，講義の開始時には精神障害者や精神疾患に対するイメージは曖昧なものが多く，約半数は恐れを抱いているとの報告[2]や精神看護学の講義の前後では差がないとの報告[3]があるが，講義に精神障害者と話す機会を設けることによってイメージが変化するとの報告もある[4]。精神科看護実習前後の比較では，偏見の是正や恐ろしさの軽減する方向に変化するとの報告が一般的である[3,5-7]。また，精神保健福祉士の養成課程の実習ではあるが，実習を通して自己評価して他者を理解して肯定的な方向に変化するといった自己イメージに関する報告もある[8]。自己イメージに関しては，自我同一性の獲得と関連づけて，自己イメージの明確性を論じた報告もある[9]。

今回，まだ大学に入学して間もない1年次の看護学生と，ある程度の専門知識を学び，以前に講義などで精神障害者と接した機会があり，これから臨地実習が始まる3年次の看護学生とを対象に，精神障害者，精神障害および自己イメージの変化の有無についてアンケート調査を行い，学年ごとの調査結果を比較検討した。

方　　法

I. 研究方法

1. 調査対象

某国立法人看護学専攻大学の1年生69名，3年生72名のうち，調査の趣旨に同意の得られた1年生50名（73%）と3年生54名（75%）を対象とした。

2. 調査内容と方法

調査内容は，①「精神障害者に対してもっているイメージ」，②「そのイメージをもつことになったきっかけや出来事」，③「精神障害者と接する機会の有無とその機会の内容」，④「精神障害はどのような疾患か」，⑤「自己のイメージ」の項目について，調査記録用紙に自由記載（複数回答）してもらった。

3. 調査期間

2007年5月7日～2007年5月10日

4. 分析方法

今回は，「精神障害者に対してもっているイメージ」に焦点を当てて分析した。学生が自由記載した内容を意味のあるまとまりでコード化し，このコードを相違点と共通点について比較することによって分類し，共通するコードごとにカテゴリー分類を行った。カテゴリーごとに「主観的イメージ」と「客観的イメージ」に分け，さらにそれぞれ「肯定的」，「否定的」，「中立的」と分けた。ただし，複数の回答があり，肯定的と否定的を含む場合は「両方」としたが，肯定的と中立的，否定的と中立的を含む場合には，どちらが主であるか判断し，「肯定的」，「否定的」，「中立的」とした。このようにして，「肯定的」，「否定的」，「両方」，「中立的」は延べ人数ではなく，実人数とした。なお，カテゴリー分けは共同著者の1人が行い，著者ら3名で検討を加えた。

自己イメージについては，精神障害者のイメージ上の用語と重複しないように，自己に対する積極的ないし肯定的な評価を「ポジティブ」，消極的ないし否定的な評価を「ネガティブ」，どちらでもないものを「中立的」と分け，ポジティブとネガティブを含む場合を「両方」とした。

5. 倫理的配慮

本研究に先立ち，書面を用いて，調査目的，調査方法，調査協力は学生の自由意志であって講義の評価とは関係ないこと，また無記名で行い，プライバシーの保護を図ることを説明し，同意書に署名をもらった学生のみを対象にした。

II. 調査対象の学習背景

現在，当保健学科で精神看護学分野教員が行っている精神看護学および精神医学ないしその近接領域の講義は，1年次前期では発達心理学（14回）および医療概論での精神疾患（2回），1年次後期では薬理学での中枢神経作用薬（1回），2年次前期では運動科学での精神科リハビリテーション（1回），2年次後期では精神看護学原論（15回）および疾病論での精神医学（7回），3年次前期では精

神看護方法論である。その後，3年次の後期から4年次の前期にかけて臨地実習がなされている。なお，精神看護学原論では，精神障害者の方から精神障害に至った経過，入院経験，地域活動などの体験談を聴く機会や，地域保健師から地域で生活している精神障害者の生活，精神科病院看護師から精神科病院に入院している精神障害者の生活について聴く機会を設けている。その他に2年次前期の地域看護学実習Ⅰで，約7割の学生が小規模作業所で精神障害者と半日間あるいは2時間接する機会がある。

結　　果

1. 回答数（表1）

①「精神障害者に対してもっているイメージ」で，複数回答は1年生が25名，3年生が50名で，平均回答数はそれぞれ1.7, 3.2であった。

②「そのイメージをもつことになったきっかけや出来事」で，記載のなかったのは，1年生が9名，3年生が6名いた。記載のあった平均回答数は，それぞれ1.5, 1.8であった。

④「精神障害はどのような疾患か」で，1年生のみ8名が記載していなかった。記載のあった平均回答数は，それぞれ1.5, 2.5であった。

⑤「自己のイメージ」で，記載のなかったのは，1年生が20名，3年生が27名いた。記載のあった平均回答数は，それぞれ1.6, 2.1であった。

2. 個々の項目の結果

①「精神障害者に対してもっているイメージ」について，記載内容から「性質」，「距離」，「行動」，「能力」，「社会性」，「症状」，「感情」のカテゴリーに分け，さらに6つに分類して集計した。結果を表2と図1に示す。なお，図1は表2の数値をもとに作成した。イメージの総数は，1年生が67，3年生が181だった。1年生，3年生とも「対象との距離に対するイメージ」が最も多かったが，次に多かったのは，1年生では「対象への感情的イメージ」だったのに対して，3年生では「対象の症状に対するイメージ」だった。1年生は，主観的イメージ数が40（60%），客観的イメージ数が27（40%）だった。3年生は，主観的イメージ数が85(47%)，客観的イメージ数が96（53%）だった。1年生では，「否定的なイメージ」が39名，「肯定的なイメージ」が1名，「中立的なイメージ」が4名，「否定的と肯定的の両方のイメージ」が5名だったのに対し，3年生では，「否定的なイメージ」が18名，「肯定的イメージ」がなし，「中立的なイメージ」が21名，「否定的と肯定的の両方のイメージ」が15

表1. 質問項目に対する回答者数と平均回答数

質問項目		1年生（$N=50$）	3年生（$N=54$）
精神障害者に対するイメージ	複数回答者数	25名（50%）	50名（93%）
	平均回答数*	1.7	3.2
そのイメージをもったきっかけや出来事	回答者数	41名（82%）	48名（89%）
	平均回答数	1.5	1.8
精神障害者と接した機会	有	21名（42%）	39名（72%）
精神障害はどのような疾患か	回答者数	42名（84%）	54名（100%）
	平均回答数	1.5	2.5
自己イメージ	回答者数	28名（56%）	27名（50%）
	平均回答数	1.6	2.1

*平均回答数：学生が単語ないし文章として記載した反応数の平均値を平均回答数として記した。

表 2.　障害者に対してもっているイメージ

カテゴリー	内　　容	1年人数	3年人数	分類*
対象の性質に対するイメージ	純粋		3	1
	暗い	1	2	2
	不安定	3	4	2
	繊細		6	3
	その他	3	3	
	カテゴリー内合計人数	8	23	
対象との距離に対するイメージ	近寄りづらい	2	2	2
	話が通じない	3	1	2
	関わりかたがわからない	5	15	3
	自己表現がうまくない	1	3	5
	その他	4	15	
	カテゴリー内合計人数	15	36	
対象の行動に対するイメージ	暴れだす	1	1	5
	予測不可能	1	1	5
	行動や言動のコントロール不能	3	1	5
	その他	0	5	
	カテゴリー内合計人数	5	8	
対象の能力に対するイメージ	特定の能力が優れている		1	4
	自分の世界をもっている		1	6
	普通と変わらない		7	6
	その他	1	10	
	カテゴリー内合計人数	1	19	
対象の社会性に関するイメージ	偏見をもたれやすい	2	3	6
	家族の負担が大きい		3	6
	その他	8	22	
	カテゴリー内合計人数	10	28	
対象の症状に対するイメージ	治療困難・難治	1	5	5
	症状に個人差がある		3	6
	誰にでも起こりうる		8	6
	服薬している	1	2	6
	その他	9	15	
	カテゴリー内合計人数	11	33	
対象への感情的イメージ	こわい	6	10	2
	大変そう	4		3
	かわいそう	2	4	3
	その他		10	
	カテゴリー内合計人数	12	24	
イメージはない	固定的なイメージはない		1	
	カテゴリー内合計人数	0	1	

*1：主観的イメージ（肯定的），2：主観的イメージ（否定的），3：主観的イメージ（中立的）
4：客観的イメージ（肯定的），5：客観的イメージ（否定的），6：客観的イメージ（中立的）
主観的イメージ総数は，1年生が40（肯定的は9，否定的は22，中立的は9），3年生が85（肯定的は9，否定的は37，中立的は39）だった。客観的イメージ総数は，1年生が27（肯定的は1，否定的は19，中立的は7），3年生が96（肯定的は7，否定的は34，中立的は55）だった。

名だった。なお，1年生で「わからない」と記載した1名は除外した。

②「そのイメージをもつことになったきっかけや出来事」について，図2に示す。1年生，3年生ともに多かったのは，講義や実習以外での精神障害者と接した機会との回答だった。その内容として，町や近所で精神障害者に遇った，小中学校時にクラスにいた，または特殊学級が併設されていた，肉親や知人にいるなどを，1年生が23名，3年生が20名あげていた。1年生ではテレビ，新聞，本などのマスメディアという内容をあげたのは17名，3年生では21名いた。3年生では講義が20名，地域看護学実習が14名で，その実人数は29名だった。

③「精神障害者と接する機会」について，図3に示す。内訳は，1年生は「ある」が21名，「なし」が29名であるのに対し，3年生は「ある」が39名，「なし」が15名だった。接する機会の内容として，1年生では，9名が小・中学校時代に学校に併設されていた特殊学級による体験をあげていた。3年生では，講義を5名，地域看護学実習を19名があげ，その実人数は22名だった。なお，接する機会の内容を記載しなかった学生に関して，接する機会が「あり」と答えた学生のうち，1年生では4名，3年生では7名がその内容を記載しておらず，図3では「記載なし」に含めた。

④「精神障害はどのような疾患か」について，主たる回答や1年生ないし3年生に特徴的な回答を図4に示す。内訳は，1年生，3年生とも精神症状や精神疾患をあげる学生が多く，1年生では25名，3年生では33名いた。1年生では自閉症や発達の遅れなどの発達障害をあげる学生が4名，3年生では2名が複数の病名の1つに自閉症をあげていた。3年生の12名は誰でも起こりうる疾患，4名はストレスや環境から生じる疾患といった発症要因をあげていた。また誤解や偏見，周囲から理解されない疾患を記載した学生も9名いた。

⑤「自己のイメージ」について，1年生では28名，3年生では27名が記載した。表3に「自己イメージ」について記載された実例を一部簡略化して示す。なお，よくわからないとの記載が2名，「自己イメージ」とは異なる記載が2名おり，不明とした。不明と記載なしをまとめて，「自己イメージ」の分布を図5に示す。内訳は，1年生では，ネガティブなイメージが12名，ポジティブなイメージが3名，両方記載が8名，中立が4名，不明が1名だったのに対し，3年生では，ネガティブなイメージが8名，ポジティブなイメージが9名，両方記載が6名，中立が1名，不明が3名だった。

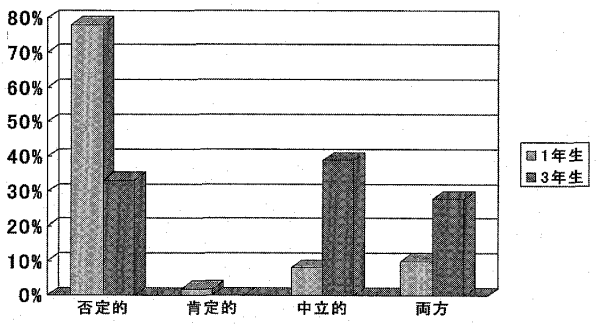

図1. 精神障害者に対してもっているイメージ

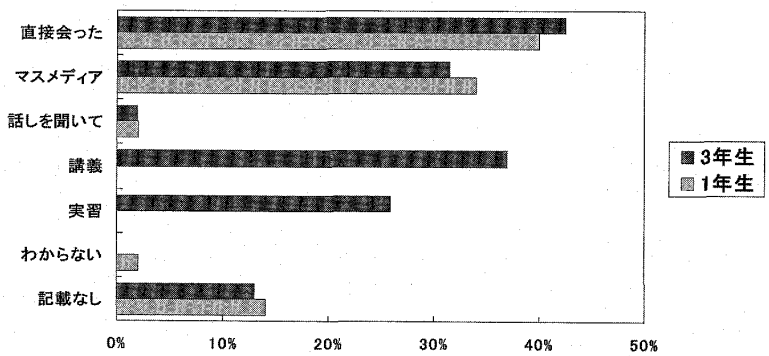

図2. そのイメージをもつことになったきっかけや出来事

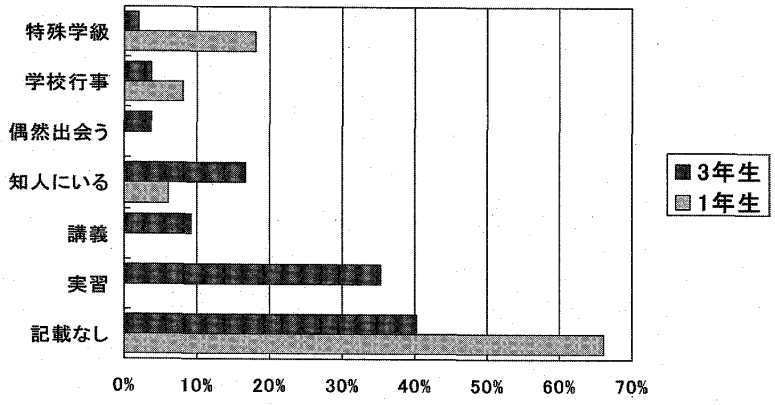

図 3.　精神障害者と接する機会について

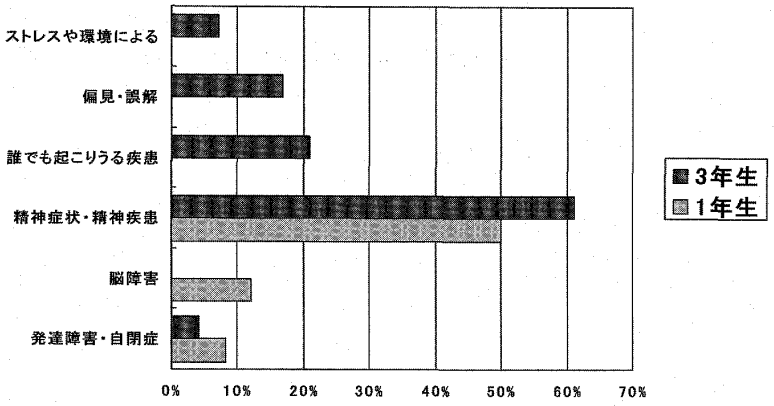

図 4.　精神障害はどのような疾患か

表 3.　自己イメージの実例

ポジティブ	明るい，おとなしい，控えめ，努力家，上機嫌，さっぱりしている，真面目，根気強い，熟考する，日常の出来事を学びととらえる，タフ，物事を公平にみる，感情に流されるのを好まない，たまに落ち込む，不完全，はっきりしている，自由，個性的，受容的，外向的，楽観的，感情の起伏は激しくない，あまり落ち込まない，優しい，頑張り屋，前向き，健康
ネガティブ	内向的，うるさい，おっちょこちょい，心配性，人見知り，気にする，自己中心的，うっかり，気分屋，優柔不断，黒い，自意識過剰気味，恥ずかしがり，萎縮してしまう，怒りっぽい，周囲に流されやすい，マイナス思考，だらしない，大ざっぱ，寂しがり屋，自己主張が下手，消極的，裏表がある，他人に依存しすぎ，意志が弱い，不安が強い，考えすぎ，分析しがち，適当なところがある，我が強い，自信がない，気分の波が激しい，人に左右される，浮き沈みがち，寝不足，自分の思ったことをいいにくい，精神障害者になる要素をもっている
中立的	普通，ヨーグルトみたいなもの，マイペース，あまり感情を出さない，騒がしい雰囲気のほうがすき

3.　3年生での精神障害と精神障害者イメージとの関連性

3年生で，精神障害に十分理解を示し，発症要因として多かった誰でも起こりうる疾患やストレスや環境から生じる疾患および誤解や偏見，周囲から理解されない疾患を記載した実人数の25名の学生が，どのような精神障害者に対するイメージをもっていたか，そのきっかけや出来事として講義や実習との関係を表4に示す。発症要因にせよ，誤解・偏見にせよ，精神障害に対する理解は精神障害者に対するイメージに違いがなかった。しかし，精神障害に対して理解を示した学生のうち，否

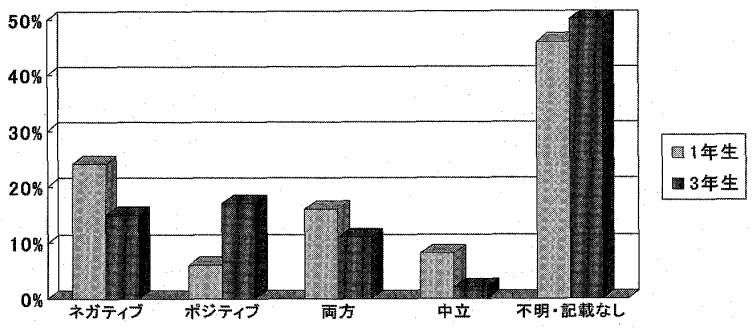

図5. 自己のイメージについて

表4. 精神障害のイメージおよび精神障害者のイメージと講義・実習との関係

	イメージを持つことになったきっかけや出来事	
	講義や実習の記載あり	講義や実習の記載なし
発症要因（16名）		
誰でもなりうる		
両方のイメージ（5名）	4	1
中立的イメージ（3名）	3	0
否定的イメージ（4名）	0	4
ストレスや環境が関係		
両方のイメージ（1名）	1	0
中立的イメージ（3名）	2	1
周囲から理解されない（9名）		
両方のイメージ（1名）	1	0
中立的イメージ（4名）	4	0
否定的イメージ（4名）	0	4

定的イメージをもっていた学生は全て講義や地域看護学実習の記載のない学生であった。講義や地域看護学実習を記載した学生は，両方のイメージ，中立的なイメージをもっていた。

考　　察

1. 回答数について

1年生と3年生の①「精神障害者に対してもっているイメージ」，②「そのイメージをもつことになったきっかけや出来事」および④「精神障害はどのような疾患か」の回答数は，3年生が多かった。その理由としては，1年生に比べ，3年生のほうが講義で精神障害について学び，また実際に精神障害者と接して話を聞く機会があったことが大きく，精神障害者や精神障害に対してイメージしやすかったものと思われる。

2. 「精神障害者に対してもっているイメージ」の形成について

カテゴリーについては，1年生，3年生とも「対象との距離に対するイメージ」が最も多かったが，次に多かったのは，1年生では主に主観的イメージが関係する「対象への感情的イメージ」だったのに対して，3年生では主に客観的イメージが関係する「対象の症状に対するイメージ」だった。1年生では主観的イメージが多かったが，3年生ではその差がなくなり，むしろ客観的イメージが幾分多かった。

「肯定的イメージ」，「否定的イメージ」，「中立的イメージ」に関しては，1年生では「否定的イメージ」が8割弱であったのに対し，3年生では3割強

に大幅に低下し，その分「中立的なイメージ」と「否定的と肯定的の両方のイメージ」が増加していた。それには，精神看護学原論の講義で自我と自己，環境との関係，ストレス・危機・コーピングおよび各ライフステージにおける精神の健康問題について学び，また実際に精神障害者の話を聞く機会があったこと，地域看護学実習では約7割の学生が小規模作業所で精神障害者との接した機会があったことが大きく，「そのイメージをもつことになったきっかけや出来事」に29名の学生が，講義，講義での精神障害者の話，地域看護学実習をあげていた。その29名の精神障害者のイメージの内訳に関しては，普通と変わらない，誰にでも起こりうる，症状に個人差があるなどの「中立的なイメージ」が17名と最も多く，「否定的と肯定的の両方のイメージ」が9名，「否定的イメージ」が3名であった。そのような体験を通して，否定的イメージだけでなく，同時に肯定的イメージを有したり，あるいは中立的イメージに変化したものと思われる。先行研究で，学生は講義や実習前の学習によって精神障害者のイメージをある程度形成し，偏見を軽減しうることが報告されている[10,11]。今回の結果もそれに矛盾するものではなく，イメージをもつことになったきっかけや出来事として，講義ないし授業のみを記載した学生もいた。それに対して，1年生ではそのような機会はなく，マスメディアによる影響の他に，「駅で叫んでいた」，「突然話しかけられた」などと市中で精神障害者に遭遇したことや小中学生の時に併設されていた特殊学級での体験があげられていたと思われる。特殊学級の児童や生徒の多くは発達障害を有し，統合失調症や気分障害などの一般的な精神障害とは異なるが，体験が少ないために精神障害者のイメージとして定着した可能性がある。

3.「精神障害はどのような疾患か」について

3年生では精神障害に対する理解が進み，1年生に比べ平均回答数も多く，発症要因として誰でも起こりうる疾患とかストレスや環境から生じる疾患と記載していた。また誤解や偏見，周囲から理解されない疾患と記載した学生もおり，これらの記載は1年生ではみられなかった。このように，3年生では専門的な学びを通して精神障害を客観的に理解することができるようになっていた。

3年生での精神障害と精神障害者イメージとの関連性の結果からは，精神障害の理解と精神障害者のイメージの変化との関連性はないと思われる。しかし，少なくとも講義や地域看護学実習で精神障害者と接した記憶が十分残っていた学生の場合には，否定的イメージだけでなく，同時に肯定的イメージを有したり，あるいは中立的イメージに変化した可能性があると思われる。

4.「自己のイメージ」について

自己イメージについては，1年生では4割，3年生では5割の学生が記載していなかったが，記載数に関しては3年生のほうが多かった。内訳については，1年生はネガティブなイメージが一番多かったが，3年生ではポジティブなイメージが多かった。

学生は20歳前後では自己イメージが明確ではないとの報告[9]があり，記載しなかった学生数が多いという今回の結果から，1年生，3年生とも自己イメージが明確ではない可能性はある。しかしながら，今回のアンケートでは，他の4つの調査内容と「自己イメージ」との関連性が乏しかったために，学生が回答できなかった可能性も否定できない。また，実習を通して自己評価して他者を理解して肯定的な方向に変化するとの報告[8]があるが，学年を経るにつれて自己イメージが明確になるのか，あるいは看護実習といった職業を明確に自覚できる活動を体験する必要があるのか，今後更に検討する必要がある。

結　　論

看護学生の1年次50名および3年次54名を対象にして，精神障害者，精神障害および自己のイメージについて調べた。精神障害者に対するイメージについては，1年生では「否定的イメージ」が8割弱だったが，3年生では3割強に低下していた。それには，精神科看護に関する講義や地域看護学実習による影響が大きいことが示唆された。精神障害については，3年生の半数近くが，誰でも起こりうる疾患，ストレスや環境から生じる

疾患，誤解や偏見，周囲から理解されない疾患を記載していたが，これらの記載は1年生ではみられず，3年生は精神障害を客観的に理解できるようになっていた。精神障害の理解と精神障害者のイメージとは特に関係なかったが，講義や実習をきっかけや出来事に挙げていた学生で否定的イメージをもっている学生はいなかった。自己イメージについては，記載しなかった学生が，1年生が4割，3年生が5割を占めていた。

文　献

1) 佐藤久夫：障害者福祉論，誠信書房，東京，1991, p. 19-24
2) 村井里依子，岩崎みすず，小林美子，坂田三允：授業開始時における学生の精神障害者および精神疾患に対するイメージ，長野県看護大学紀要，**3**, 21-30, 2001
3) 伊東由賀，山崎美晴，永利美花，山村　礎：精神障害に対する看護学生の態度の変化，日保学誌，**7**, 241-249, 2005
4) 日向朝子，関　澄子：看護学生の精神障害者に対するイメージの変化―講義で精神障害者と自由に話すことを通して―，自治医科大学看護学部紀要，**1**, 79-84, 2003
5) 福田由紀子，小林純子：精神看護学実習前後における看護学生の精神障害者へのイメージの変化，日本赤十字愛知短期大学紀要，**14**, 123-131, 2003
6) 村井里依子，松崎　緑，岩崎みすず，小林美子：学生が実習前後に抱く精神障害者のイメージ―精神看護実習前後の比較を通して―，長野県看護大学紀要，**4**, 41-49, 2002
7) 齋　二美子，石田真知子：精神看護実習における看護学生の精神障害者及び精神科看護び対する意識の変化と学びの関連，東北大医保健学紀要，**15**, 43-56, 2006
8) 橋本みきえ，大西　良：精神保健福祉士の養成課程における学生の自己イメージと精神障害者イメージの変化―実習との関連から―，西九州大学・佐賀短期大学紀要，**36**, 29-39, 2006
9) 白石裕子，則包和也：精神臨床看護実習におけるコラージュ療法の活用―学生の自己理解・他者理解の促進をめざして―，香川県立医療短期大学紀要，**3**, 141-147, 2001
10) 坂田三允：精神科看護教育の特性と学生の意識実習で変わる学生の意識，看護教育，**30**, 526-530, 1989
11) 中川幸子：本学学生の精神看護学実習前後の精神障害者イメージの変化に関する一考察，日本赤十字看護大学紀要，**5**, 29-36, 1991